2

北京の結果と分析

張　燕（北京師範大学教育学院教授）

2005年3月、私たちは北京市の８か所の幼児園で幼児の生活に関する調査を行った。対象とした幼児園は北京の西城、海淀、朝陽、大興、延慶など５つの区と県に及び、各タイプの幼児園を含んでいる。内訳は、教育機関が運営する園３か所、地域組織が運営する園１か所、政府機関と研究所での附属幼児園２か所と民間運営の園が２か所である。調査対象は主に年少、年中、年長クラスの幼児の保護者である。アンケート用紙に記入した保護者は1,000人あまりで、総計992人からの有効回答を回収した。アンケートを配布した範囲と回収数からみて、基本的に北京市に居住する幼児（北京市に流入している農民の季節労働者の子女を含まない）の生活と家庭における育児の一般状況を反映していると考えてよい。アンケートの集計と分析から、以下の結果を得た。

１．調査対象となる幼児とその家庭の基本的状況

（１）一人っ子

調査対象となった992世帯中、一人っ子は68.8%を占めているが、２人きょうだいは15.4%、さらには３人以上のきょうだいがいる家庭も存在する（p.8 図Ａ−３）。中国の計画出産政策は決して厳格に決められたものではなく、中国の実情に即して制定されたものである。中国は農業大国であり、社会保障制度の整備が不十分で、農村の人たちは今も家族を老後のよりどころにしなければならない。このため、子どもを育てることが老いに備えることになるという考え方は変わっていない。計画出産政策は、人権に配慮した政策で、農村では第１子が女子であった家庭では第２子を産むことが許される。このほか、もし第１子が治癒の見込みのない病気にかかっていたり、あるいは障害を持っていたりする場合、第２子を産むことができる。また、一部の高収入の家庭では罰金を支払って戸籍を申請したり、国外で出産した家庭では制限を受けない状況下で第２子を産んだりすることもできる。このような状況は、計画出産政策をまだ徹底していない地域もあることを表している。

調査データからみると、幼児の性別は１対１で、男子と女子の割合は基本的に均衡がとれている（p.8 図Ａ−１）。

（２）家族構成

調査から、核家族は51.5%を占めていることがわかる（p.11 表Ｃ−１）が、およそ50%の家庭は依然として祖父母（父方あるいは母方の祖父母）と同居する三世代同居である。北京市のような大都市では、大方が夫婦共働きであり、かつ住宅事情も比較的よいほうで、

伝統的な家庭と核家族の割合は半々である。その他の地区では一般的にいって、核家族の割合はさらに低くなるであろう。三世代同居には上の世代に育児を助けてもらうという考えが働いているかもしれない。

（３）家庭の収入

家庭の収入というプライバシーにかかわるデリケートな項目では、無答不明が16.0%あった。

回答を得られたデータからみると、家庭間の月収のひらきは大きい。中流程度の月収「4,001元～10,000元」の家庭が44.5%を占め、中の下の「2,001元～4,000元」は20.2%、「2,000元以下」が3.5%である。「12,001元以上」の高収入を得ている家庭が11.4%を占めているのは注目に値する（p.184 基礎集計表）。これは、北京市の幼児園がサービスの対象としているなかに、一部高収入の層が確かに存在することを表している。経済的に高収入であれば、その家庭は必然的に良好な物質条件を備えている。それに相応して子どもの教育においても投資を惜しまない。ここで指摘すべきは、北京と上海は経済の発達した中国の大都市として特別であることだ。調査は決して中国全体の一般的な状況を代表するものではない。

（４）父母の年齢と学歴

調査に協力した子どもの父親の年齢は「31～35歳」と「36～40歳」という２つの年齢層に集中している。「41歳以上」の比率も9.2%である。母親については60.6%と半数以上が「31～35歳」であり、「26～30歳」は15.3%、他に19.6%が「36～40歳」であった（p.10 図Ｂ－２～３）。およそ70%が一人っ子という状況から分析すると、父母の出産年齢は比較的高い。出産の年齢が比較的高い保護者は、往々にして育児に一層細心の注意を払い、育児不安が比較的高いかもしれない。

保護者の学歴については母親の多くが「短期大学」あるいは「四年制大学」卒業で、それぞれ28.6%と37.3%を占めている。父親は次の３つの層に集中している。「短期大学」が20.7%、「四年制大学」が37.5%、「大学院」の学歴を有するのが17.1%である（p.11 表Ｂ－２～３）。

この結果は、保護者の文化的教養が高く、学歴が高くなっている傾向にあることを示しており、子どもの教育に対し一定のプラスの影響があるであろう。

２．幼児の生活状況

（１）幼児の生活リズムは基本的に規則正しいが、睡眠不足の傾向がみられる

調査結果をみると、幼児の日ごろの生活のリズムは、基本的に幼児の成長に適合していることがわかる。しかし、就寝時刻が遅く、睡眠時間が不足しているという状況が存在する。

北京の幼児は平日、朝の起床時刻は59.2%が「７時頃」に集中し、「６時半頃」と「７時半頃」の起床がそれぞれ16.1%と19.0%である（p.46 図１－１－１）。昼寝の時間は「１時間くらい」が15.7%、「１時間半くらい」と「２時間くらい」が27.0%と41.0%であった。昼寝をしないものはわずかに4.2%だった（北京と上海のみ調査、図表省略）。平日の就寝時刻は「21時頃」と「21時半頃」、「22時頃」がそれぞれ21.1%、38.3%と24.5%を占める（p.48 図１－１－５）。幼児の生活リズムは、基本的に規則正しいと考えられる。しかし、注意しなければならないのは、１割近い子どもの就寝時刻が22時半をすぎていることで、「22時頃」も24.5%に達している。これは、

多くの幼児の睡眠時間が10時間未満であることを示す。このような結果は、興趣班（習い事）への参加やテレビの視聴時間が長すぎることと関連があるのかもしれない。

幼児の朝食時刻は79.0％が「８時頃」で（p.47 図１－１－３）、夕食時刻は「17時半以前」が52.6％である。また、15.4％、13.4％、10.7％の幼児がそれぞれ「18時頃」「18時半頃」「19時頃」に夕食をとっている（p.48 図１－１－４）。北京の幼児園の託児時間は大半が10時間前後であり、３回の食事と１回のおやつを提供している。幼児は朝食と夕食を通常、幼児園でとる。このような状況は上海とは若干異なっている。

（２）興趣班（習い事）への参加が多い

調査で得られたデータからみて、北京の幼児の大多数が興趣班（習い事）に参加している。２つ以上の習い事に参加している幼児もいる。習い事の種類をみると、大部分が「絵画教室」「英会話などの語学の教室」「楽器・音楽」に集中している。それぞれ29.9％、22.9％、20.5％で、「計算・かきとり教室」に参加する幼児も14.9％に達している（p.56 図１－２－１）。具体的なデータからみると、幼児の年齢が上がるにつれて、学習系の習い事への参加も増えている。

習い事への参加の質問では、35.4％がいずれの項目も選んでいない（図表省略）。それは、一部の幼児園には習い事が設置されていないことと関係があるかもしれない。後述の「幼児園への要望」の調査項目の結果からみると、65.4％の母親が「保育終了後、おけいこ事をやってほしい」と希望している（p.103 図４－２－１）。このことは母親にやはり強いニーズがあることを示すものである。

家庭の毎月の習い事の費用、絵本、玩具などへの支出にはばらつきがあり、40％近い家庭が毎月「51～200元」を支出し、25.0％が「201～400元」を支出している。「501～1,000元」やさらに高額を支出する家庭も12.9％に達している（p.174 基礎集計表）。このような状況は、前述した収入と子どもにかけている教育費用の支出との関係を裏づけているかもしれない。

（３）テレビなど現代のメディアが幼児の家庭生活のなかで多く活用されている

調査結果から、テレビやビデオCD、コンピュータなど現代的なメディアが幼児の生活にますます重要な役割を果たすようになっていることがわかる。「ほとんど毎日」テレビを見ている幼児は74.3％、「DVD（VCD）」「ラジカセ（CD）」や「パソコン」についてはそれぞれ、17.1％、13.8％、3.5％である。このほか、「学習用教具・知育玩具」の使用率が比較的高く、「ほとんど毎日」使用する子どもは13.6％である。これは保護者の教育観を反映しており、子どもの進学を考えてのことであろう。

喜ばしいことに、絵本は依然として子どもたちに最も人気があり、重要な役割を果たしている。北京の幼児のうち、「絵本」を「ほとんど毎日」を読んでいる子どもは50.6％を占め、「週に３～４日」を読んでいる子どもは17.3％である（p.170 基礎集計表）。しかしながら、現代メディアの出現によって、子どもの心の糧というべき絵本の果たす役割が、制約や制限を受けざるを得ないというのも事実であろう。

テレビを毎日平均「１～２時間」見ている割合は71.0％を占める。DVD（VCD）を毎日「30分～１時間」使用する幼児は55.3％である（p.171 基礎集計表）。幼児が幼児園から帰宅して自宅で過ごす時間は限られている。そのため、テレビを見る時間が長いと幼児のその他の活動に当然影響を与え、戸外での活動や友だちと交流する時間が制限される。

調査から判明した状況からみると、幼児はテレビなど現代のメディアを好み、つねにテ

レビあるいはDVD（VCD）を見ながら、手足や体を動かしたりその内容について話したり、また家の人と交流したりしている。このことは、現代メディアが幼児に対し大きな魅力を持っているということであろう。いかにその長所を発揮させ、そのマイナス面を避けるかは、幼児教育にかかわる仕事をしている者が真剣に取り組まなければならない問題である。

３．母親の子育て観、将来に対する期待

（１）子育てで重視すること

子育てで重視することをたずねたところ、「基本的生活習慣を身につけること」92.9%（「とても重視している」＋「まあ重視している」、以下同様）、「他者への思いやりを持つこと」92.9%、「屋外で遊ぶこと」90.7%、「友だちと一緒に遊ぶこと」93.0%、「親子でたくさんふれあうこと」90.6%、「自然とたくさんふれあうこと」89.2%、「身体を丈夫にすること」89.6%、「興味や関心を広げること」82.6%、「数や文字を学ぶこと」73.2%、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」71.９%、「外国語を学ぶこと」60.0%という結果になった（p.75 表２－３－１）。生活習慣や人への思いやりなど、よい基本的生活習慣の形成と道徳心の育成を最重要課題として位置づけているのは、もちろん正しいことである。友だちとの交流や親子の交流・活動も保護者から広く重視されている。戸外での活動、自然との接触や体づくりもかなり重視されている。それに対し、知識・技能の学習活動は順位からみて最後に置かれ、重視の度合いは低くなっている。このことは、幼児が日ごろ行っているさまざまな活動の位置づけについて、保護者の認識が基本的に正しいことを示している。

とはいえ、興味を伸ばす、数や文字を学ぶ、芸術的な才能を伸ばすことや外国語学習など、知識・技能の領域の活動は低く位置づけられているものの、比率はかなり高く、いずれも60%を超えている。これは、母親がやはりこれらの活動を重視していることを示している。このほか、幼児園に対する要望に関する項目の結果をみると、依然として大多数の保護者が「知的教育を増やしてほしい」と希望し、幼児園の活動が終わってから習い事を行うことを求めている。わが子に将来出世してほしいと願う保護者の気持ちの一端が、ここからうかがえる（p.103 図４－２－１）。

保護者は友だちとの交流や戸外での活動、体づくりなどをより重視してはいる。しかし、実際の生活では習い事に多くの時間を費やしており、さらに前述のテレビ視聴に関するデータと考え合わせてみると、テレビの視聴時間も長い。そのため、重視しているような幼児の心身にとって有意義なことの実行や実現は、難しいことがわかる。

（２）子どもの将来に対する期待は妥当である

今回の調査データからみると、北京の母親が子どもの将来に寄せる期待は妥当であると考えられる。どのような人になってほしいかについて10項目の比率を高い順にみると、「自分の家族を大切にする人」が71.8%で第１位、「仕事で能力を発揮する人」46.9%、「まわりから尊敬される人」45.5%、「自分の考えを貫き通す人」33.2%、「社会のために尽くす人」27.6%、「リーダーシップのある人」15.5%、「経済的に豊かな人」15.1%、「友人を大切にする人」14.2%、「のんびりと生きる人」14.0%、「他人に迷惑をかけない人」4.9%となっている（p.73 図２－２－１）。この結果は、上海の状況と少し異なっている。子どもの将来に対する期待は、伝統的な人間観の影響をかなり受けており、北京は人格や道

徳心、社会的責任や功績を重視する傾向が反映されているのではないだろうか。

しかし同時に、新しい傾向があらわれていることも示されている。思ったよりも多くの母親が「リーダーシップのある人」になってほしいと願っており、またゆったりとした、お金のある生活をしてほしいと願っている。これは、社会の趨勢と関係がありそうである。今日では、お金をたくさん稼いでゆったりした生活を送るということが、有用な人材であるか否か、あるいは成功か否かを計る基準になっているのである。

注意すべきは、「友人を大切にする人」の順位が比較的低いことである。これは母親が人としての重要なこの資質をいささか軽んじていることを示している。このほか、「他人に迷惑をかけない人」は人として最低限守るべきこと、あるいは最も基本的なことであり、現代人が必ず備えなければならない市民としての意識や資質であるが、残念なことに、選択した母親はわずか4.9%にすぎない。このような現象が、私たちの学校教育や社会教育と密接に関係しているのは間違いない。長期にわたってわが国の道徳教育は空疎な説教に流れ、市民教育は空白のままであった。私たちは道徳教育に励んできたが、人の基本的資質、すなわち最低限身につけるべきことを軽視してきたのかもしれない。人間としての基本的資質が備わっていなければ、道徳教育をしても、あまり意味がないのではないだろうか。近年、高学歴の人たちが罪を犯したり自殺したりする例がしばしば報道されるが、このような状況に私たちは注目すべきである。市民教育にあるべき地位を与える時期に来ているのである。

（３）学歴に対する高すぎる期待と有名大学への入学希望

子どもの学歴に対する期待では、北京の母親の中で短期大学を望むのは0.0%である。母親の期待は四年制大学や大学院に集中し、それぞれ24.9%と71.5%で（p.77 図２－４－１）、子どもに大学院の学歴を望む母親が圧倒的多数を占めている。子どもの学歴に対する期待が高すぎて、すでに現実離れしている。社会における人材の学歴は正規分布を示すはずで、学歴が高い者の割合も小さくなる。いかなる社会経済条件のもとでも、ピラミッドの頂上にいる人間はごく少数しかいない。子どもの学歴について現実離れした期待を抱くことで、母親は必然的に育児不安に陥る。それによって、知らず知らずのうちに子どもに対するプレッシャー、とくに学習面でのプレッシャーを増すことになる。

さらに、母親の子育て観に関する質問では、子どもの将来の学歴について聞く項目がある。北京の母親が「世間で名の通った大学に通ってほしい」を選択した比率は、なんと74.1%（p.71 図２－１－１⑦）にのぼっている。多くの母親が子どもの学歴に対して高い期待をもち、有名大学に通ってほしいと考えている現状は、いまの中国の社会で成功したことを計る基準として、学歴や社会的地位がよく用いられる傾向と無関係ではない。同時に、育児において母親が虚栄や盲目的な競争へ走る傾向があることが見え隠れする。これは、幼児の健全で調和のとれた成長にとって有害無益である。

（４）母親は育児に不安を抱いている

つづいて、子育てについての意識をたずねた結果である。母親の心配のトップは、「いつも子どもの安全と健康を心配していること」（北京と上海のみ調査、p.176 基礎集計表）で、「よくある」と「ときどきある」の比率（以下同様）はそれぞれ24.8%と43.3%であった。また、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」は12.0%と41.8%、「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」は13.0%と60.5%、「自分の子どもが他人の子どもより劣っていると思うこと」（北京と上海のみ調査）は1.5%と16.6%

であった。このような状況は、子育てにあたって、母親がよく迷い、孤立感を感じていることを表している。とくに子どもの安全や健康上について不安を感じている。これは、大多数が一人っ子、すなわち一家族に１人しか子どもがいないためであるが、同時に現在、社会で保護者向けの研修や子育て相談が欠如していたり、保護者がどのように手助けを求めたらいいかわからなかったりするためではないだろうか。また、母親が現在の社会の治安に不満を抱き、安全ではないと感じていることを間接的にあらわしているのかもしれない。

さらに、子育てと母親自身の成長との関係についてであるが、北京の母親の大多数は比較的正しい認識を持っている。67.3%の母親が「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」に「よくある」と回答しており、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思うこと」も64.8%である。また、「子育てによって自分も成長していると感じること」は、「よくある」41.9%、「ときどきある」37.7%となっている（p.175 基礎集計表）。育児と自分自身の成長を同じ歩みとして考える母親の姿勢は、喜ばしいことである。育児においては、前もってトレーニングをして準備を整えてから子どもを産み育てるわけではない。現代社会が生涯学習を強調しているように、子育てをしながら、絶えず学んでいくことが必要であり、また子どもから学ぶことも多いかと思う。それらを繰り返しているうちに、母親は自然に自分自身の成長をも実現していくのである。

また、81.6%の母親は、「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」が「よくある」と回答している。「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」は、「よくある」50.5%、「ときどきある」36.0%である。母親の子どもに対する肉親の情、子どもを愛する気持ちは当然のものかもしれないが、この結果は母親が子どもの成長に比較的満足していることの表れでもある。

ただし、一部の母親は子育てに対して否定的または悲観的である。「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」には、36.3%が「ある」（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）と回答し、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」も20.2%である。「子育てのために、自分を犠牲にしているのにもかかわらず、子どもがなかなか自分の期待にこたえてくれないこと」（北京と上海のみ調査、p.176 基礎集計表）は15.5%、「子どもに八つ当たりしたくなること」は11.7%が「ある」と回答している。

次に、現在の生活や子どもの成長に対する満足度についてみてみよう。現在の生活に「とても満足している」は23.7%、「まあ満足している」は65.6%であった（p.83 図２－６－１）。子どもの成長への満足度では、「とても満足している」のが20.1%、「まあ満足している」のが72.1%で、この２項目にいずれも満足していない（「あまり満足していない」＋「ぜんぜん満足していない」）母親はわずかに６～９％であった（p.84 図２－６－２）。このことは、改革開放政策が始まって20数年来、確実に中国社会に生活の変化が起きていて、人々の経済状況や生活レベルが大きく改善され、向上したことを物語っている。それが、子どもの健全な成長に有利な条件を作り出し、良好な物質的基盤を提供したのである。これは北京の保護者のだれもが認め、身をもって感じていることでもある。

４．父親の家事や育児への参加状況

ここでまず母親の仕事の状況をみてみよう。働いている母親（「常勤（フルタイム）」＋「パートタイム」）が77.1%で、「専業主婦」は5.0%にすぎない（p.10 表Ｂ－１）。「週５日以上」働く母親は90.2%である。妻の仕事を理解している（「とても理解してくれる」＋「まあ理解してくれる」）夫は83.9%である（p.175 基礎集計表）。こうした結果は、前述した「女性が天の半分を支えている」こと、すなわち女性は男性と同等の社会的、政治的、経済的地位を有する状況と一致する。これはまた、都市における家庭生活の実態とライフスタイルを表してもいる。中国の都市においては、一般的に、夫婦２人とも働いており、家庭生活や育児には夫婦双方の共同の努力を必要とする。

（１）父親の家事への参加状況

家事において、父親が「買い物をする」（「ほとんど毎日する」＋「週に３～５回する」＋「週１～２回する」、以下同様）比率は比較的高く、64.7%である。「掃除をする」のは51.3%、「食事の後片付けをする」は53.4%、「食事のしたくをする」は少し低くて46.1%だが、「ごみを出す」は66.6%に達している（p.177 基礎集計表）。これは、双方が完全に対等ではないにしても、父親が母親と共同で家事を担っていることを示している。

毎日の母親の帰宅時刻については（p.175 基礎集計表）、85.6%が夕方の「17時台」「18時台」「19時台」の３つの時間帯に集中し、父親の帰宅時刻については（p.87 図３－１－１）、61.2%が夕方から夜にかけて、「18時台」「19時台」「20時台」に集中している。父親と母親を比べると、母親のほうが帰宅時刻が若干早い。これも父親の家事への参加が母親より少ない原因の１つであろう。

父親の家事への参加状況に満足している（「とても満足している」＋「まあ満足している」、p.94 図３－３－１）母親は57.9%に達しているが、83.8%がもっと家事に参加してほしい（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様、p.94 図３－３－２）と回答している。一方、父親に家事にもっと参加してほしいと思わない（「あまりそう思わない」＋「ぜんぜんそう思わない」）母親も15.6%いる。これは１つには伝統的な「男は外、女は内」という家庭観と関係があるのかもしれない。もう１つには、父親のほうが社会的責任と家庭責任がより重いことと、ある程度の関係があるのかもしれない。

（２）父親の育児への参加状況

次に、育児への参加状況である（p.91 図３－２－２）。大多数の父親は、「週に３～５回」（15.3%）あるいは「週に１～２回」（61.4%）子どもと一緒に外で遊んでいる。「子どもと一緒に室内で遊ぶ」は「週に３～５回する」は30.1%、「週に１～２回する」は34.3%であった。父親が子どもとの関係を重視し、一緒に遊ぶなかである程度の教育ができると考えているのであろう。このほか、子どもの行動や様子をつねに見守って、「子どもを叱ったり、ほめたりする」父親は60.3%（「ほとんど毎日する」＋「週に３～５回する」）、「週に１～２回する」の比率は32.3%である。父親が子どもへの教育をかなり重視していることがわかる。

子どもの世話に関しては、父親も積極的にしている。とくに子どもが病気の時には、84.4%の父親が面倒を見ると回答している（p.178 基礎集計表）。「子どもを寝かしつける」父親は20.8%（「ほとんど毎日する」＋「週に３～５回する」、）で、「週に１～２回する」も30.2%ある。「子どもをお風呂に入れる」のは、「ほとんど毎日する」と「週に３～５回する」の合計が9.3%、「週１～２回する」は31.6%である。ちなみに、母親の子育

て観に関する質問で、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」という意見を選択した母親は67.9%を占めていた（p.70 図２－１－１①）。この質問と結びつけて考えると、母親と比べれば父親の育児への参加は少ないだろう。とはいえ、父親として、小さい子どもに対してある程度の生活面の世話をするのは、何はともあれ、なかなかできないことではないだろうか。

父親の育児参加の現状への満足度は家事参加より高く、57.7%が「満足している」（「とても満足している」＋「まあ満足している」）と回答している（p.94 図３－３－３）。また、子育てはなんといっても父母双方の義務と責任であり、母親も仕事を持ち、社会的責任や役割を担わなければならない。このことから、父親にさらに育児に参加してほしいと考える母親は、ほぼ100%に近い（p.94 図３－３－４）。

５．子育て支援に関して

（１）子育て支援サービスの施設と形態

保護者が子どもを幼児園に送っていく時間は、朝「７時半以前」から「８時頃」に93.8%が集中している（p.49 図１－１－７）。子どもを迎えに行く時間は、「17時頃」33.0%、「17時半頃」41.7%、「18時頃」17.0%の３つの時間帯に集中する（p.50 図１－１－８）。このデータは、子どもが幼児園での生活が毎日およそ９時間であることを示している。同時に、北京の幼児園の幼児教育サービスの時間が９時間であることを意味し、前述した幼児園の一般状況を裏づけている。

母親の幼児園に対する要望は、幼児に対する教育サービスの増加や改善のほか、母親に必要な子育て支援サービスを提供することに集中している（p.103 図４－２－１）。

幼児に対するサービスでは、「保育の時間を長くしてほしい」と望む母親が26.4%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様）、「家族が病気の時に、預かってほしい」42.2%、「子どもが病気の時に、預かってほしい」22.4%となっており、この３つの項目については北京と上海の結果が基本的に一致した。これらのなかでは、「家族が病気の時に、預かってほしい」という比率が最も高く、母親のニーズが最も強いということであろう。このことは、幼児園の現在の保育サービスが必ずしも母親のニーズを完全には満たしておらず、改善が行われるべきだということを示している。保育時間の延長要求に関しては、北京の母親の65.7%が消極的である（p.179 基礎集計表）。このデータは、多くの母親がそれを必要としていないことを示しているのかもしれない。また、人々が正規の託児施設（単一の全日制託児形態と固定化されたサービスへの考え方）に長年慣れきっていて、現在の登園・降園時間を当たり前だと考え、改善の要求を出さなくなっている可能性もある。

また、母親が仕事以外で家を空けるときに子どもの面倒を見る人（機関・サービス）の結果（p.101 図４－１－３）をみると、北京は22.8%が「父親」、76.0%が「祖父母や親戚」と回答している。託児施設に一時的に預けること（「幼稚園・託児所の一時託児」＋「民間の託児サービス（一時預かり）」）を選択した母親はわずか11.4%にすぎず、「自治体の育児支援サービス」を選んだのは0.0%で、１人も選択しなかった。これは一時預かりに対して、母親のニーズがあるにもかかわらず、このようなサービスを提供している幼児園は少なく、自治体の育児支援サービスは完全に空白状態であることを示している。（近年、北京市の一部の幼児園は３歳未満の幼児と保護者向けに週末の教育サービスを展開してはいるが）社会の子育て支援サービスの形態はごく限られたものであり、このため保護者には

選択の余地がないのである。

（２）母親の育児相談や保護者交流に対するニーズが高い

北京では、93.1%の母親が「子育て相談ができる場所になってほしい」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様）を希望しており、そのうち半数が「とてもそう思う」と回答している。これは母親のニーズが高く、普段、子育て相談の機会がめったにないことを示している。現在、社会や地域では、このようなサービスはほとんど行われていない。したがって、保護者は幼児教育施設に支援を求めるほかはない。

そればかりでなく、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」というニーズも非常に強く、92.7%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）に達しており、「とてもそう思う」は56.9%である（p.180 基礎集計表）。これも、幼児園がこのような活動をほとんどしてこなかったことを表している。子育ては実践性がとても高いものである。幼児をきちんと教育するには、家庭と園との連携が重要であるばかりでなく、母親の間の交流も欠くことができない。共通の関心事である育児について経験を共有し、教えあうことができるからである。母親は同じ立場であり、互いに経験や体験をもとに話ができる。それは、それぞれの子育てに役立つ。また、母親自身が成長するための大事な手段であり、生涯学習の１つでもある。しかし現状では、母親はほとんどこのような機会に恵まれず、助けを求めようにもたたくべきドアがないのである。

このような幼児園に対する子育て支援のニーズは、実際上、幼児教育にこの面で潜在的な巨大市場が存在することを物語る。託児施設は母親のニーズを把握し、絶えずサービスを改善すべきである。とはいえ、託児所や幼児園の主要な役割は正規の受け入れであるので、あらゆる子育てサービスを請け負うことができるわけではない。一方、地域は住民の生活の場であり居住環境として、母親の支援に大いに力を発揮できる可能性がある。政府や関係部門は、真摯にこの問題を検討し、実行可能な措置をとり、適切な政策を出して、速やかにこの空白を埋め、相応のサービスを提供して保護者や社会のニーズに応えるべきである。

６．北京市の都市部に住む幼児の生活における問題と解決策

今回の調査結果に対しては、満足に感じるところが多い反面で、心配になるところも多かった。北京の幼児の生活状態、およびその成長は基本的に良好であり、保護者は教育をとても重視し、子どものための投資を惜しまず、良好な物質的条件を整えている。しかし、一方では、幼児の成長やその環境には落とし穴が存在し、注意を払う必要がある。

（１）幼児が感じるプレッシャー

調査結果からみて、北京の都市にいる幼児は、大きなプレッシャーを受けている。こうしたプレッシャーの多くは、保護者の不適切な育児方法や期待からきている。たとえば、幼児は、多くの時間を習い事に費やしている。加えて、現代のメディア、とくにテレビが人々の日常生活に大きな影響を与えている。この結果、幼児は戸外で活動したり遊んだり、友だちと交流したりする機会を失って、幼児らしさがなくなり、ほとんど学習マシーンに変わっているものもいる。

今回の調査では、一部の幼児が睡眠不足であると推測される（p.51 図１－１－９）。にもかかわらず、「幼児園への要望」に対する回答（p.103 図４－２－１）では、「知的教育を増やしてほしい」という回答が９割（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）、「保育終

了後、おけいこ事をやってほしい」という回答が6割を超えている。関連する資料と合わせて分析すると、母親が習い事などで学習量の増加を希望するのは、往々にしてよい小学校、中学校への入学を希望することと密接に関係している。このことは、受験を目指した教育が、就学前からすでに始まっていることを物語る。

都市に住む幼児の家庭の経済状況は、以前に比べて大幅によくなっている。収入の向上によって、保護者は子どもの教育への投資を増やしたい、子どものためにできるだけよい教育環境を整えたいと願い、しかもそれらのことが可能になっているといえよう。しかし、同時に、そのために生まれるマイナスの影響にも目を向けなければならない。物質的な豊かさは、精神的な豊かさをもたらしてくれるとは限らない。とくに保護者の教育投資が功利的であり、盲目的な競争心を持ち、見返りを求めるものであれば、思いがけない傷を子どもに与えることがある。たとえば、保護者が子どもに対し、一方的に将来の目的を定め、あまりにも早い段階から知識や技能を教え込んだり、学歴に対する非現実的な高すぎる期待を抱いたり、有名大学を崇拝したりすると、幼児に精神的に大きなプレッシャーを負わせ、本来楽しいはずの幼児期の生活から彩りを奪ってしまう。

アンケート中の幼児の性格に関する質問では、保護者の記入状況からみて、多くの項目に幼児の本来の性質が反映されている。たとえば、90%以上（「とてもそう」＋「まあそう」、以下同様）の子どもが外で遊ぶことや、自分のやりたいことを積極的にやること、友だちと一緒に遊ぶことを好んでいる。しかし、こうした子どもの成長についての回答にも、注意を要する傾向があることに気づかされる。たとえば、3割近くの保護者が自分の子どもは「1人で遊ぶのが好き」に「そう」（「とてもそう」＋「まあそう」）と答えているし、7割は「家の中で遊ぶのが好き」を肯定している。「誰とでもすぐ仲よくなれる」については、「そうでない」（「あまりそうではない」＋「ぜんぜんそうではない」）という回答が15.8%おり、「がまん強い」も41.9%の保護者が否定している（p.180 基礎集計表）。このような状況に注意を払い、背後に隠れている原因を探らなければならない。

（2）意識と行動の不一致

子育てについての意識をみると、都市の母親たちは多くの不安を持っていることがわかる。子どもがうまく育っていくかどうか心配し、子どもの安全や健康を心配し、子どもが将来高い学歴を持ち、有名大学に入り、仕事で成功し裕福な人になることを期待している。このような穏やかではない育児心理は、子育てに緊張感をもたらし、窮屈な雰囲気を作っている。知らず知らずのうちに子どもの成長にプレッシャーを与え、健やかな成長にマイナス影響を与えてしまう。

母親の育児における過剰な不安は、1つには、家庭教育そのものの特徴、たとえば孤立しがちであることや、閉鎖的であることと関係がある。同時に、母親のあせりをあおぐような現在の市場主義にも影響を受けている。母親は子育て支援を望んでいるが、どこに助けを求めたらよいのかわからないのである。

さらに、母親の回答には、考え方と行動の不一致がみられる。幼児のどの活動をより重視するかという観点からみれば、大多数の母親は生活習慣や人への思いやりなど道徳心を身につけることをトップに位置づけ、戸外活動や友だちとの交流も比較的重視しており、知識・技能の学習を重視する姿勢は比較的弱い。ここからは、母親が何をより重視すべきかについて、正しい認識を持っていることがわかる。しかし、具体的な場面になると、母親がとる教育方法や行動は、目指す方向と異なる。たとえば、子どもを習い事に参加させたり、知的教育の強化を望んだりして、その結果、子どもは他の活動をする時間的な余裕がなくなってしまう。たとえ彼らが重視すべ

き活動をさせたいと考えても、時間もエネルギーもなくなってしまうのである。

また、母親の子育て観をみると、多くの母親は子どもを尊重し、見守る姿勢をとっている。たとえば、わがままを言ったら、わかるまでやさしく言い聞かせるのがよいと考え、子どもの自主性を重んじる必要があると考えており、文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるということに賛同している。しかし、実際の具体的なシーンになると、子どもの気持ちを推し量っていないようにみえる行動が多い。ある研究によれば、興趣班（習い事）をさせるのは、多くが保護者の興味の反映であり、子どもの興味ではないことを示している。子どもにとっては、思いきり遊ぶことが最大の興味であり、知識や技能の学習を強制されることは、子どもの本来の性分に背くものである。

ところで、このように育児における考え方と行動が一致しないという現象を、どう分析し、考えたらよいのだろうか。保護者は社会的に承認されている考え方から影響を受けていて、それほど的外れな意識を持っていない。しかしながら、実際の行動においては、伝統や習慣が依然として強く支配している。それに加えて、幼児教育における市場主義とメディアのあおりの影響を受けて、無意識に知識・技能の学習を押しつける方向へと保護者を走らせてしまうのである。今回の調査は、これまでに行われている先行研究を、まさに裏づける結果となった。また、近年、雑誌や新聞紙上に発表された報道も、こうした傾向を証拠づけている。たとえば、2005年６月20日の『北京青年報』には、ある保護者からの投稿が載っている。子どもが４歳の時、遊ばせるのをやめ、よい学校に入るためにいろいろな習い事に参加させたが、結局失敗してしまったという話である。

（３）現代メディアの重要性とマイナス影響

調査結果から、テレビやDVD（VCD）などの現代のメディアは、すでに幼児の生活の一部分になっていることがわかる。しかも、それが幼児の生活に占める割合はますます大きくなりつつあると考える。このような状況で、伝統的な絵本の読み聞かせが減少している。幼児は、家庭で多くの時間をテレビや現代のメディアに費やしており、内容についてはともかく、ただ時間の面だけからみても、子どもの心身の発達に役立つ活動、たとえば戸外活動や友だちとの交流などの時間がなくなっているのである。

また、前述したように調査結果からは、一部の幼児が睡眠不足であることがわかる。このような状況には、十分な注意が払われるべきである。その原因として、保護者が基本的生活習慣の形成を軽視していることや、テレビの視聴時間が長すぎること、習い事への参加の影響などが考えられる。

この問題に対し、テレビなど現代メディアの長所を生かし、そのマイナス面を最大限抑えるために、研究を深める必要がある。私たちは、メディアのマイナス面を抑える方法を究明し、積極的な対策をとる必要に迫られている。まず、よい生活リズムが形成されるように注意を払い、テレビ視聴時間をコントロールし、同時によい生活習慣を身につけさせねばならない。さらに、子どもを連れて外に行き、自然に触れ、心身を楽しませ、友だちと交流する機会を一層多くするよう保護者に呼びかける必要がある。

また、現代メディアが氾濫している今日ではあるが、幼児向けの絵本などの伝統的なメディアについて伝承すべき大事な文化、精神の糧であるという価値観を改めて確認し、親子での読書運動を大いに提唱する必要がある。そうすることによって、１つには親子のコミュニケーションが深まるが、同時に、子どもの一生にも読書が積極的な役割を果たす

ようになるだろう。

（４）社会と教育のミスリードが生む悪循環

調査結果を分析してみると、幼児の生活と成長過程に存在する一部の問題や保護者の不適切な教育方法は、相当程度、誤った価値観によってもたらされていることがわかる。マスメディアの煽動やミスリードは、保護者の幼児教育に対する認識の誤りをさらに悪化させている。

調査で得られた状況からみると、北京の保護者の学歴レベルは、以前に比べ高くなっている。しかし、幼児教育は１つの専門分野であり、分野が違えば素人同然ともいえる。保護者は、多くの人に認められている教育観、たとえば「子どもを尊重しよう」などの流行の言葉を口にすることはできるが、幼児教育についての専門知識を勉強したわけではない。保護者の行動を本当に支配しているのは、自分自身の教育観、たとえば、「教育とは知識や技能を伝授することである」とか、「学んで優れればえらくなり出世する」といったものである。間違った伝統的な教育観というものは、もし意識的に改めなければ、つねに力を振るい、人々の行動を支配していくものである。

近年、中国の幼児教育は次第に市場化の方向に向かい、ひろく関心が注がれている。多くの専門外の人たちがこの市場に参入し、おいしいパイの分け前にあずかっている。保護者のニーズに付け込むように、市場とマスメディアがみだりにあおりたてている。一時、「神童（天才）を造る」「24時間知力開発」「潜在能力の開発」「幼児早期英語学習」「天才教育は０歳から」などといった情報や宣伝が、絶えず人々の目に飛び込んできた。都市部の家庭ではほとんどが一人っ子であるため、保護者は「スタートラインで負けるな」とか「個性を伸ばす」などというスローガンに惑わされて、思わず行動してしまうのである。さらに、一部の幼児園は専門機関としての指導的役割を果たすのではなく、市場の動きに迎合している。こうした社会や教育のミスリードが、保護者の間違った考え方と不適切な教育方法を助長し、悪循環に陥る結果を生んでいるのである。

幼児の成長する権利は、社会によって保障されなければならない。このような状況に対して、メディアは社会的責任感をさらに強め、ニュースの効果を上げるための煽動を避け、偽りの宣伝を極力減らす必要がある。それらに代えて、事実に基づき、真実を求める報道を行う必要があろう。社会が発展する方向や教育原則に合っているかどうかを、ニュースの内容を取捨選択したり、報道のポイントを決めたりする際の原則としなければならない。「無知は過ちではない」である。このため、いかに科学的な育児知識をひろく宣伝し、普及させるかが非常に重要になってくる。

これについて、専門機関としての正規の幼児教育施設は、責任を他に転嫁せず、幼年期の価値や幼児教育の役割を保護者に正しく認識させる必要がある。それと同時に、家庭教育が幼児の成長にかけがえのない影響を与え、保護者自身に重大な責任と役割があることを理解するように導く必要があるだろう。子どもに一層の自由を与えて制限を減らし、平常心を多くして功利的な考えを減らすことを、いま、とくに強調しなければならない。おとなや保護者の体面からではなく、子どもにとっていいこととは何かという観点から出発してはじめて、適切な教育方法を見いだせるのであり、成長に有益な環境を整え、子どもの健全な成長がはかれるのである。

（５）幼児園が担うべき社会サービス機能

近年、中国は経済システムの転換をはかっている。幼児教育は当然このような背景に適合するように、考え方やシステムの変革を実現しなければならない。幼児園は、社会と市場の多様化のニーズに対応し、教育サービス

施設としての意識を強める必要がある。そして、園の運営を開放し、すすんで社会と保護者のニーズを理解し、対応して、従来のサービスの形態と方法を調整し改善をすすめ、社会のニーズを満足させなければならない。調査結果をみると、全体的に北京の幼児園は、依然として単一の全日制の託児システムをとっており、一時的な託児サービスやその他のサービスを提供することはごく少ないことがわかる。調査のなかで明らかになった保育時間延長や従来とは異なるサービスへの要望は、事実上この面でのサービスが欠けていることを示している。保護者から出された育児相談、保護者間の交流への切実な要望も、幼児園がサービス精神にかなり欠けていることを物語っている。運営が閉鎖的であり、変わらないままで千変万化に対処しているというのが、現在の幼児園の現状かもしれない。

幼児園での教育と家庭教育が歩調を合わせ、両者が緊密に協力してはじめて質の高い教育が可能になり、本当の意味で幼児の健全な成長を促進できるのである。家庭と幼児園が協力し合う教育を実現し、幼児園が幼児教育の専門機関として保護者をリードし、主導的な役割を積極的に果たさなければならない。さらには、教育機関として文化的な影響力を周囲に及ぼし、社会に正しい教育観、とくに教育の質に対する正しい考え方を宣伝し普及させる必要がある。たとえば、「人の能力」や「教育の成功」について議論を巻き起こして社会の流れをリードし、市場に影響を及ぼすこともできる。さしあたって、幼児教育のなかに、市民教育に関する内容を増やすべきである。教育を本来の目的に回帰させ、次世代の資質の強化をはかることは、非常に重要なことである。北京の幼児園は、この面でかなり遅れている。

幼児教育の世界的な動向からみると、幼児園はいま、地域の幼児教育の中心になりつつある。その役割として、地域の正規の託児サービスを担うことのほかに、多様化した幼児保育サービスを提供すること、保護者の子育てにおける疑問や迷いに対して相談サービスや研修を行うこと、社会に向けて正しい教育観や保育方法を発信することなどがあげられる。幼児教育は、地域での生活を有機的に構成する要素である。北京の幼児園が地域との連携をどう強めたらよいか、さらに地域にどう溶け込み、互いに頼りあい刺激しあえるようになるにはどうしたらよいか、まだまだ長い道のりが残っている。

（６）時代の要請としての地域教育と育児支援サービス

今回の調査の結果、北京では地域の育児支援サービスがほとんど空白であることがわかった。保護者に必要が生じた場合、幼児教育施設に支援を求めるほかは、自分で解決方法を見つけるほかはない。たとえば、母親に用事ができた場合、大半は祖父母が子どもの世話をするか、父親が見るか、お手伝いさんを頼む。

一般的にいって幼児園など正規の幼児教育施設では、幼児に対する教育サービスを主要な役割としている。したがって、たとえ将来、地域にうまく溶け込んで、社会サービスの機能を担い、それ以外のさまざまなサービスを提供できるようになったとしても、すべてを引き受けることは不可能であろう。市場経済の下では、社会の幼児教育に対するニーズは多岐にわたる。ましてや幼児教育の重要な特徴は、その社会性、大衆性および、家庭や地域との緊密な連携にある。地域の中では、民間、個人、企業、地方政府さらにはニーズを持つ保護者などが担い手となって、ニーズと条件に基づいたさまざまなかたちの非正規教育を発展させ、柔軟で多様な育児支援サービスを提供することが可能になるだろう。一方では、さまざまな階層の保護者のニーズを満足させ、同時に１つの就業機会として、仕事をもたない人を動員して公共サービス事業に参加させることもできる。言い換えれば、地域を中核として、需要と供給の間を橋渡しす

ることは、非常に便宜性があり、実行しやすい方法なのである。

教育部は、1997年にすでに「わが国の幼児教育が発展する方向は、地域を拠り所に、正規と非正規を結合させた組織形態を作ることである」という方針を出している。近年、この方針が繰り返し確認されている。しかし、それには地方政府のさらなる注力や、関連する部門の協力が必要であり、多様化がすすむ幼児教育と地域の育児支援サービスの面で具体的な政策や措置がとられるのを待たなければならない。世界ではこの分野ですでに一定の成熟した実践が行われ、成功例が蓄積されている。私たちはこうした国外の事例を参考にすると同時に、先行する地点を作り、まず最適な方法と形態を探ったうえでそれを広めてもよいのである。

地域の中には、幼児教育に資する多くの資源が内包され、潜在的な教育のニーズや市場も存在する。地域の育児支援サービスを発展させることは時代の要請であり、大いに行われるべきである。そのなかで、肝要なのは考え方の転換なのである。

【参考文献】
「コンピュータ割り振りからの逃避８年間のマラソン―ある保護者からの手紙」『北京青年報』(2005年6月20日付)。
張燕　2004「地域教育は幼児教育事業発展の必然である」『幼児教育』浙江省教育報刊社。